生徒向け校長通信 ～ 名言にちなんだエッセイです

あうん

教師と生徒・保護者があうんの呼吸で教育ができることを願って‥‥

第 ３９ 号
令和６年７月１１日

全力無意味、全力無謀、全力本気。

有川浩『キケン』

ごく一般的な工科大学である成南電気工科大学のサークル「機械制御研究部」、略称【キケン】。部長・上野、副部長・大神の二人に率いられたこの集団は、日々繰り広げられる、人間の所行とは思えない事件、犯罪スレスレの実験や破壊的行為から、キケン＝危険として周囲から忌み畏れられていた。これは、理系男子たちの爆発的熱量と共に駆け抜けた、その黄金時代を描く青春物語である。 （Amazon「本の内容」から転載）

第70回三条祭お疲れ様でした。仮装パレードにチームパフォーマンス、催し物に有志発表とみんなの学校祭に賭ける思いが爆発した３日間だった。僕は覆面筋肉コンテスト「ザ・マスクド・マッチョ」の審査員を務めたが、細部まで趣向を凝らし熱意溢れる素晴らしいものだった。盛り上がる会場の中で、ふとある小説を思い出した。有川浩さんの『キケン』だ。

作者自身（有川さんは女性である）の「あとがき」にこう書いている。「どうやら老いも若きもすべての男子は【機研】を持っています。『キケン』を発表して、私は一体何人の男子に『僕の学生時代もねぇ』と語られたか分かりません。」女子からみれば全く馬鹿馬鹿しいことでも、全力でぶつかって全力でやってしまう、そんな男子独特の経験が誰しもあるものなのだ。もちろん、僕にだってある。

蒼玄寮（そうげんりょう） ～ 僕の大学の男子学生寮。大学の敷地内にあるものだから、着の身着のまま大学に行く学生が多かった。とにかく毎日が修学旅行であり、学校祭のような日々だった。４月の新入生歓迎行事は単なる歓迎会では終わらない。寮の仕組みを教える寮委員会主催の説明会に始まり、新入生歓迎ハイキング・オールナイト遠足と行事は続く。夏は寮祭でオールナイトディスコ。秋は出身地区別運動会。冬は大忘年会。季節ごとに行事が企画され、全力本気で立ち向かっていく。それぞれはあまりに馬鹿らしく、あまりに無謀そのもの。

僕が３年の時、寮祭でプロレスをやることになった。メインイベントは、うらやむほどの肉体美を持つ体操部の先輩が、華麗な技を繰り出す本格的なルチャリブレであった。ポスターを作成し、ちらしで観戦ポイントを示し、当日は実況に解説者も配置するという、凝りに凝ったイベントだった。僕の役回りは前座で、典型的なイロモノ。白いマスクにピンクのルージュ。マスクの下には濃い化粧。笑わせるのが仕事なのに、ただただ気持ち悪がらせてしまうという悲惨な結果。それでも翌年もそのポジションで出るのだから自分もたいしたものだと思う。

実は数年前に、突然、先輩からこのプロレスの DVD が送られてきた。懐かしいやら、恥ずかしいやらで、とにかく見てたら泣けてきた。ああ～、あの時代‥‥。

僕は大学を卒業してすぐ北海道に帰ってきてしまったから、なおさらあの青春時代を懐かしむ思いが強いのかもしれない。でも、あの時代は消えない。なくならない。僕の芯を作ったのがあの日々なのだ。損得なしに、思いっきり付き合うことができた先輩や仲間たち。お互い、腹がでてきたり、頭が薄くなってしまったけれど、会うとほぼ４０年の時間なんてあっという間になくなってしまう。

これは大学での話だけれど、高校とて同じこと。君たちがいつか高校時代の友達とともに過ごした日々を懐かしむ時がきて、その中で今年の三条祭がいい思い出として蘇ってきたら嬉しい。

ところで『キケン』では、主人公の思い出話を面白がって聞く彼女がいて、羨ましく思う。僕の奥さんは大学の同級生だけど、寮の話をすると、「寮生って、きったないよね～」と返ってくる。そりゃまあ、そうなんだけど‥‥。